

平成 21 年 6 月 12 日現在

研究種目：基盤研究 C

研究期間：2007—2008 年度

課題番号：19520707

研究課題名（和文） 西表島地名データベースの構築

研究課題名（英文） Database construction of the toponymy of Iriomote Island, Okinawa

研究代表者 安溪 遊地

山口県立大学・国際文化学部・教授

50149027

研究成果の概要：1974 年に着手した西表島地域研究の中で、あらゆる分野の研究や地域発展の基盤となるべき伝統的地名についての確かな資料が公刊されていないことから、これまでに収集した約 1000 件の地名について、方言による発音の正確さに重点をおいて再確認のためのフィールドワークを実施し、地名の意味の現地での説明や、土地利用の変遷などについてのデータベースの構築をおこなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：西表島、地名、データベース、土地利用、自然認識

## 1. 研究開始当初の背景

地名は、そこに人が生きてきた証しであり、その泉を掘り当てることができるならば、その地域における自然と文化の関係の歴史の全体像を描くための、またとない手がかりともなるものである。しかしまた、伝承が失われてしまえば古い由来のある地名が、あるいは完全に忘れられ、誤って伝えられ、さらにはその土地とはまったく無関係な外来の地名に置き換えられるということも起こるのである。現在の日本は、まさにそうした本来の地名の忘却の過程にあるといつてよい。そして、ことに西表島ではそうした傾向が著しい。

沖縄・奄美の地名研究では、ひとつの島の地名の全体像を示しえた報告は現在に至るまで非常に少ないのが現状である。そこで、1974 年以後の地域研究の中で記録した約 1300 の地名を整理して、ひろく利用できる形にすることの必要性が強く感じられた。

## 2. 研究の目的

自由に検索出来る形の西表島地名データベースを構築するために、方言の正確な記述が不可欠であることから、地名のリストを現地の方々に確認していただくことを研究の当面の目標とした。

これによって期待される波及効果は、以下のようなものである。

従来の地名研究においては、沖縄の地名を、たとえば、南島諸語の地名あるいはアイヌ語地名と共通するものがあるとか、平家の落武者の命名であるとかいうような推定も一部に行われてきたが、まずは島の方言でこれを理解することが肝要である。西表島の場合は、この島を木材資源の採取や通い耕作の対象などとして利用してきた周辺の島々の方言をも視野に入れなければならないことが認識されるようになるであろう。

さらに、本当は存在しないはずの地名についても、地域社会に本来の地名についての具体的な知識がひろがるのが期待できる。十分な調査なしに誤って記録された可能性がつよい地名群も、いったん印刷されてしまえば、由緒ある他の地名を圧倒して、そちらの方が本物として通る場合がある。とくに、国土地理院地図にみられる不適切な記述（例えば、アウ離が、「ウ離島」と書かれ、観光用の新地名「ゴリラ岩」の掲載など）については、国民が基本資料として利用するものであるから、可能な限りすみやかに修正されるべきであり、この調査結果は、そのための基礎資料として役立つものである。

### 3. 研究の方法

従来の、地名カードや空中写真を活用したインタビューに加えて、ビデオによる撮影を行い、発音の正確な記録を心がけた。また、米軍が1945年に撮影した高精細空中写真の一部が利用できたので、これをもちいた生活誌の聞き取りも実施した。鹿川村などの廃村にも足を伸ばして、実地調査をおこなった。

特に留意すべきことは、研究者と地域住民との関係である。たんなるアンケート調査や、一方的な尋問口調のものとならないように、これまでの調査経験を生かして、人間的な関係の中でおこなうことに最大限の配慮を払った。

そのために、これまでに発表した報告集の手渡しや、その意義の説明なども、調査に入る前の重要な活動の一部である。

### 4. 研究成果

シノニム等を含み1300項目に達している西表島の地名の全体について、ほぼ確認作業を終えることができた。伝承者の減少などのため、あらたに得られた地名はそれほど多くなかった。とりまとめにあたって、複雑な方言の発音の記述に調査もれがあることがわかったため、再度の録音などによる確認をフィールドワークによって実施することとした。正確な発音を添えたデータベースを構築

することは、学問の進展にとっても、地域の活性化にとっても基本的に重要な取り組みである。

これまでに西表島の地名についての伝承を、申請者に語って下さった話者のみなさんの多くが故人となり、若者たちは多くの地名伝承とは無縁な暮らしのなかで、島の歴史や自然について知る機会を永遠に失おうとしているように見える。この調査は、島の文化の後継者たる人々とともに、あらためて西表島の各地を踏査することで、現場にたつて地名伝承を再確認し、継承をめざす、という実践的な意味ももっている。

この研究の実践を通して、(1)ともすれば、大きな島の語源考のような、思弁的な袋小路にはいりがちな南島地名研究を科学的分析的な水準に高めるとともに、(2)地域文化の伝承者を育てるという、二重の目的が果たすことを企図したのであるが、前者の目標はほぼ達成され、後者についても西表島の現地での講演会の開催などを通して、若者たちを含む地域の多世代の住民に、地名をはじめとする伝承研究のすばらしさと重要性の一端を伝えることができた。

具体的な研究成果を、執筆した報告や学会発表にそって紹介すると、地名研究にあたって陥りやすい誤りを指摘する論考をまとめた。その誤りとは、1)聞き間違いなどによって調査者があらたな「地名」を増やしている例があること。2)アイヌ語や外来語に語源を求める場合は、かならず現地を踏査するとともに、一点だけの情報では非常に危ういこと。3)八重山の政治的な中心であり続けている石垣島の調査者が周辺の島々の地名などの伝統文化を研究する際に、無意識のうち石垣島の方言で記載してしまう傾向があり、これもローカルな現象ではあるが「文化的ジェノサイド」にあたるものとして、十分自戒すべきこと、などを述べた。

琉球処分以前の役人による記録にも、興味深い内容があることに注目して、明治30年の崎山村の役人の日記を分析した。その中に、西表島の地名が書き込まれており、また村人からの贈り物のリストの中に、西表島の方言と石垣島の方言を併記するという、事例があることも報告した。

さらに、西表島の地名が歴史に登場するもっとも古い資料として、『朝鮮王朝実録』の1479年5月6月の記事があることが知られているが、そこに「所乃」の地名があり、これが現在の「祖納」に比定されていることから、韓国の文化人類学研究者、全京秀(チョン・ギョンス)教授とともに、西表島での伝承をさぐるフィールドワークをおこなうことができた。このことは、西表島をはじめとする八重山の地名とそれにまつわる歴史の研究が、日本国内だけでなく、例えば韓国でも熱

い関心呼び起こしうるものである、という事実が確認できた。

それらの成果を、現地の住民のみなさんに還元するため、西表島と石垣島において、講演会をおこない、地名と歴史や文化について、多世代の人々の関心を喚起した。

これらの研究結果を踏まえて、発表した論文のひとつは、は、明治30年の西表島西部の崎山村の役人日記「必要書」から庶民の生活を読み解くという内容である(蛭原・安溪、2009)。この中で、役人の母語である石垣島の方言による表記と、赴任地の西表島の方言の双方が記述されていることから、従来の解読には誤りが多かったことを指摘した。そして、貝などの地域ごとの方言の多様性が高いものの解読のためには、地名のような原則として在地の方言で表現されることが多い、その意味では多様性の少ない方言の研究が欠かせないことを示した。

もう一つの研究報告は、データベースの構築に直結しつつ、その前段をなす成果である。地名研究には、実はさまざまな落とし穴がある。一つは、この科研費を申請した理由のひとつである、方言を正確にききとり記載することの難しさである。このために生じているさまざまな誤記の中で、以下のものは多くの地図で現在も間違っただま表記されることが多いものである。

ここで、間違っただま表記されることが多い西表島の地名について、誤った地名(△)と本来の地名(◎)を対照しておこう。

※まちがって発音されやすい地名

△カンピラの滝→◎カンピレー。意味は、神々の交際場、または神々の鎮座場。  
△マリユード、△マリウドの滝→◎マリユドゥ(MA・RI・YU・DUと四拍で発音)。意味は、「水が廻る淀」で古文書には「丸淀」とある。

△そとばなれ島→◎ほかばなり(方言で◎フカパナリ)。西部の小島。外離島という漢字にひきずられた言い方。

※まちがって表記されやすい地名

△千立村、△干立村→◎干立(ほしたて)村。まちがって書かれることが多いので、大正時代に星立村と改名したが、最近では本来の干立にもどした。方言ではフタデという。

△南風見岳(はいみだけ)→◎南風岸岳(はいきだけ)。南岸の高峰。西部方言で◎パイキシダキという。パイキシというのは、「南側が切りたっている」という意味だが、東南にあった南風見(はいみ)村と混同されたもの。

△ウーシーク森、△ウニシーク森、△ウンシーク森→◎ウシクムリ。西部の山の名前。昔の地図で地名が等高線の上に印刷されてい

たためにおこった間違い。～ムリというのは、腕を伏せたような地形をさす言葉。

△ウ離島→◎アウバナリ(方言ではアウ、アウバナリ)。西表島の東北の岬に接する小島。国土地理院地図の「ア切れた間違い」。

△沖の神島、△仲の神島→◎仲之御嶽島(なかのうがんじま)。西表島の西南にある小島。崎山村の方言ではナリワンといい、「流れてきた神の島」の意味だと伝承している。網取村ではナニバン、祖納村ではナニワンという。

※伝統に配慮せずにつけられた観光用地名

△太陽の村→◎ウナリ崎(方言ウナザシ)。一帯をウナザシといい、岬の突端の海辺はパイコチと呼んでいる。

△月が浜、△月ヶ浜→◎トゥドウマン(トゥドウマリともいう)。

△星砂海岸→◎ニシコチ。県道の標識になっている。浜の陸側は、フシクという地名で、昔の牧場あと。

△ゴリラ岩→◎ウンバナリ。西南部のサバ崎の先端部。

これらの例は、地名研究の最初の落とし穴として比較的わかりやすいものであるが、地名の意味や語源の解釈となると、実に恣意的な解釈が横行しているため、何が正しいのかを判断することが非常に困難なことが多い。例えば、島の方言による解釈をあとまわしにして、倭寇地名、アイヌ語地名などとの関連を先に考えるような習慣はあらためるべきである。このことについて、アイヌ語地名研究の大家であった、山田秀三氏からの手紙をいただいたことがあるので、論文中に資料として添付したが、それを以下に再録しておく。平成元年4月の日付がある。

御丁寧なお手紙と資料をお送り下され、ほんとうに有難うございました。私には貴重な資料でございます。

先日、武蔵小杉でピナイの話の伺い、思わず見たいと申しましたが、実は私はもう90歳で医者から疲れることのないように注意を受けておりますので、そう簡単には長い旅行ができない、残念な状態でございます。

処があの方に私がそう申したということが北海道に伝わり、ワープロで印刷され、道内然るべき人たちに配られ、更に意見を求められて来て目をパチクリさせております。しかたがない、地名をそう簡単に云々すべきではないことを伝えなければ、と思っている処でありました。

今、私がやっていることは、実はほとんどない臆病みたいな状態であります。だいぶ前に、「東北地方の北半分の線までは、アイヌ語地名が残っていて、少なくとも或る時代には、アイヌ語族が濃厚に居住していた。その

線を一步南に下るとアイヌ語風な地名が急にごく薄くなり、形も日本語かどうかと思わせられる姿で、今は何とも云えない」と書き、その説は考古学者を中心に、大体受け入れられているようでもあります。

言語の服部四郎先生が、あなたの説はよく分かったが、それから南はどうなっているかが気にかかる。その南の続きを貴君の流儀で調べて貰えないか、とお話がありました。

物堅いので聞こえた服部先生でもそう云われる。私も気にかかるので、その後機会あるたびに福島県、新潟県、関東地方北辺と、私のいう南限線の南を歩いて来ました。アイヌ語風な地名を求め、それが北から伝わる地名の脈絡に乗るかどうか、地形は北の方の同類地名と同じであるかどうかを調べるのでありますが、実際は材料の少ない土地では、判断が極めて困難です。ごく僅かなものに、長々と材料を並べた上で或いはアイヌ語系かと、ボツボツと語っているのが、今の私としてのせい一杯なのでございました。

詩人じゃありません。感想で物を云えば、若い研究者方をあやまることになるのが恐ろしいのであります。

その調査方法を次の代に伝え、だんだんと西にまで及ぼしたいと、このごろはアイヌ語や地名に熟達した若い研究者を伴って歩いています（ほんとうは私だって九州や沖縄にまで、調査を自分でやりたいのですが）。

だがピナイはまるでアイヌ語の形でございますね。北海道によくあるピ・ナイ、東北北部に多い比内が連想されます。ピナイのアイヌ語義は、はっきりしません。地里真志保君は、ピ・物イ（小石川）もあったろうし、ピンナイ（傷川。えぐれたような川）の転もあったらしいと云います。歩いて見て、東北北部の比内の多くは、小石川のようにありました。

ただボツンと一つだけあっただけでは、実は判断が困難です。アイヌ語では同形類形地名が散在するのが普通でありますので、同形地名が北の方へと続いているか否かも大切な問題点で、私が北から南、西へと一步一步、調査を進めていくべきだと考えているのは、そんなこともあるのでした。

ただ、九州北東部から近畿地方にかけて、大陸文化が濃く入って、古代文化を分断していることも考えられます。それらを考慮に入れながらも、地名調査は点ではなく線で見なければ、というのが私の流儀で、或いは頑固すぎるかもしれません。

それでも私は九州南部から沖縄にかけての地名があこがれのようなものを感じて参りました。もう老人になって、それをどう処理して行ったら、というのが本心であり、ま

た周辺の若い研究者方に、その考をどう引きついでらよいかと考え込んでいるのであります。（引用おわり）

さらに、「文化的ジェノサイド」という報告を書いた。これは事典での解説事項なのだが、最新の調査の結果をも盛り込んだ考察とした。

「文化的ジェノサイド」とは、必ずしも直接の身体的な破壊をとまわずに固有の民族文化をまるごと消し去ってしまうことを指す。また、エスノサイドをレムキンの意味としてではなく、ユネスコのように文化的ジェノサイドの意味で使う例もある。（中略）

伝統的な地名が、外来の地名に置き換えられることもまた、文化的・言語的なジェノサイドのひとつの形である。たとえば温泉で有名な登別は、アイヌ語では *nupur-pet* すなわち「濁った川」という地名であったが、これにあてた漢字から「のぼりべつ」となったものだし、札幌市豊平区の地名月寒も、元来は、*chikisap* というアイヌ語だった。地名に漢字をあて、それをさらに日本語読みして、もともとの地名の持っていた豊かな意味を失ってしまうといったことは、現在も日本の各地で進行中である。西表島西部の聖地トゥドゥマリの浜は、復帰後リゾート関係者などによって「月が浜」などと呼ばれてきた。この名称が道路標識にまで登場したことから、約30年にわたる地元から働きかけによって現在は正しい標識となっている。しかし、その近くのフシクの浜が、現在の通称の「星砂の浜」から復帰するのはまだ先のことのようにである。

2009年2月、日本最南端の高校、石垣島の八重山商工高校の郷土芸能部による伝統芸能の発表会が、初めて西表島で催された。八重山の島々で傳承される民俗芸能の上演であったが、全国の高校で2位となる文化庁長官賞を受賞するほどの高いレベルの、若々しい演舞と歌サンシン（三線）は、会場を埋めた島びとたちに大きな感動を与えた。これは、1970年代には農村のいたるところにあった民俗芸能が、いまでは例外的に珍島という島で高齢者が演じることができただけになってしまっている韓国の現状と比べると、驚くべき違いであるという（同席した全京秀ソウル大教授のコメント）。各島々で開催されている、子ども達による「島ことば大会」などとあいまって、いままさに八重山の方言による民俗芸能が文化的ルネサンスのただ中にあり、学校教育がその原動力のひとつとなりうることを示す経験だったといえよう。

しかし、そこにもなお問題は残っている。実は奄美・沖縄の島々の方言の多様性はきわめて大きく、とくに八重山では音素の数だけに注目しても、与那国島の3母音から波照間島の7母音まで実に多彩なのである。それに

もかわらず、長く政治の中心が石垣島に置かれてきたことから、石垣島での発音が標準とされ、古典芸能のコンテストにおいても、石垣方言がきちんと発音できるかどうか、評価の重要な基準になっている。高校が石垣島にしかない中で、ふるさとの島の歌の石垣方言での歌い方を高校で習って公演する時、高齢者の世代は孫の晴れ姿に涙を流しつつも、言いようのない違和感を覚えることがあるのである。

西表島の地域おこしリーダーの石垣金星さんは、芸能の世界での石垣島の支配が、サンシンの楽譜にあたる「工工四（クンクンシー）」をもつことをひとつの背景としていることに気づいて、約30年の歳月をかけて、西表島の民謡の工工四を完成させた（石垣、2006）。これもまた、文化的ジェノサイドの中で消滅に瀕したひとつの文化のサバイバルの試みであるといえよう。

人間を対象とするフィールド科学に関わる者は、ユダヤ人を識別するためにナチスに協力してジェノサイドに荷担した自然人類学の歴史や（シュルマン、1981）、関東軍からもらったアヘンを聞き取り調査への協力の謝礼として渡しながら調査をすすめた、我が国の民族学・文化人類学（全、2005）への反省を踏まえて、いかにすればジェノサイドの側でなく、文化的なサバイバルやルネサンスの側に立つことができるかが、問われている。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

蛭原一平・安溪遊地、2009「明治末期の西表島における生業活動——役人日記『必要書』を手がかりとして」『南島史学』73: 51-78

安溪遊地、2009「地名研究の落とし穴——西表島を中心に考えてみる」『南島の地名』7号印刷中

〔学会発表〕（計1件）

安溪遊地「濟州島民がみた15世紀の沖縄——生活文化と民衆の記憶の持続性をめぐって」『韓国沖縄琉球研究会 第4回大会——琉球列島を通じてみる東アジアの文化』2008年10月31日、韓国ソウル大学校

〔図書〕（計2件）

安溪遊地・安溪貴子、2009『大学生をムラに呼ぼう——地域づくり実践事例集』（第一章「島は誰のもの——「ヤマネコの島」の問いかけ」みずのわ出版）135頁  
安溪遊地「文化的ジェノサイド」秋道智弥ほ

か、2009『地球環境学事典』弘文堂（項目の執筆）印刷中

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕（当該地域での講演会2件）

安溪遊地「濟州島民が見た八重山の生活文化と民衆の記憶力」『八重山文化研究会・特別講演会』2009年2月16日、石垣島・大浜信泉記念館

全 京秀・安溪遊地、「私の祖先が見た500年前の祖納」『祖納公民館・講演会』2009年2月19日、西表島・祖納公民館

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

安溪遊地（）

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし